

長良川の舟運②

物質輸送で上流と下流を
行き来した川船

前号では、昭和初期までの物資輸送の中心は長良川など河川を利用した川船であったこと、あちこちに川湊（土場）があり、米・薪・炭・竹・茶など上流の産物が下流の都市部・名古屋や桑名などに運ばれていたことを紹介しました。今回は、前号で紹介し切れなかった石船のこと、また下流から流れに逆らって何を積んでどのように川上に向かったのかを紹介したいと思います。



長良川を上る川船

1. 石船（川石を運んだ川船）
輪中地帯の家屋・水屋・命塚などの建設や護岸工事には、川石は絶対に欠かせない資材でした。

下流域では採掘できない川石は、すでに江戸時代から中流域で採掘され、川船によって下流域の石問屋や工事現場まで運ばれていたのです。

（大正10年生まれ・芥見町屋の石船の船頭さんの話）
石船は昔からありましたが、栄

えた時期は、大正から昭和10年頃まででした。当時町屋には船頭の家が50軒ほど、船も50杯ぐらいいったと思います。

石船は主に長良川上流の美濃町（現美濃市）曾代あたりまで石を拾いに行きました。拾った石は長良や揚げ門（現在の金華橋あたり）に忠節用水の取り入れ口があり水門があった）の間屋へ運ぶのが普通でした。日置江や墨俣方面まで売りに行ったこともあります。

搬され、「灰屋」と呼ばれる問屋や農家に買われ、各地で利用されました。この灰は「海水を含んだ水で育った稲だけに塩分が含まれているからよく効く」と言われました。

車で運ばれて行きました。長良川中流域の多くの川湊でも、桑名や名古屋など伊勢湾方面まで物資を運んだ川船が帰ってくる頃を見計らって、それぞれの土場に農家の人たちが集まって来ました。そして一人で20〜30俵ものわら灰を船頭から購入しては、荷車に積み込んで帰って行きました。

この問屋は上流の村々から運ばれてくる薪や炭を預かり、下流に向かう大型の船に積み替え、名古屋や桑名方面に運びました。そして帰りは、愛知県飛鳥や鍋田周辺、長島町周辺、海津市周辺で仕入れた40〜150俵のわら灰を積んで、小熊野湊に上ってきたのです。それらは、武儀郡（現・関市や美濃市）や稲葉郡（現・岐阜市や各務原市）、山県郡（現・岐阜市北東部や山県市）の村々に馬車や荷



小熊野湊があった付近



尻毛湊があった付近

わら灰の他にも、下流域から上ってくる川船で運ばれた物がありました。墨俣湊や長良川支流伊自良川沿いに位置する尻毛湊には、石炭や粉炭（名古屋港から）、土管や瓶（常滑より）、万古焼（四日市より）、ニガリ（桑名より）、塩などが運搬されました。瓶には赤瓶（田の肥だめ用）と水瓶（家庭用）の二種類があり、土管には13種類がありました。また万古焼には

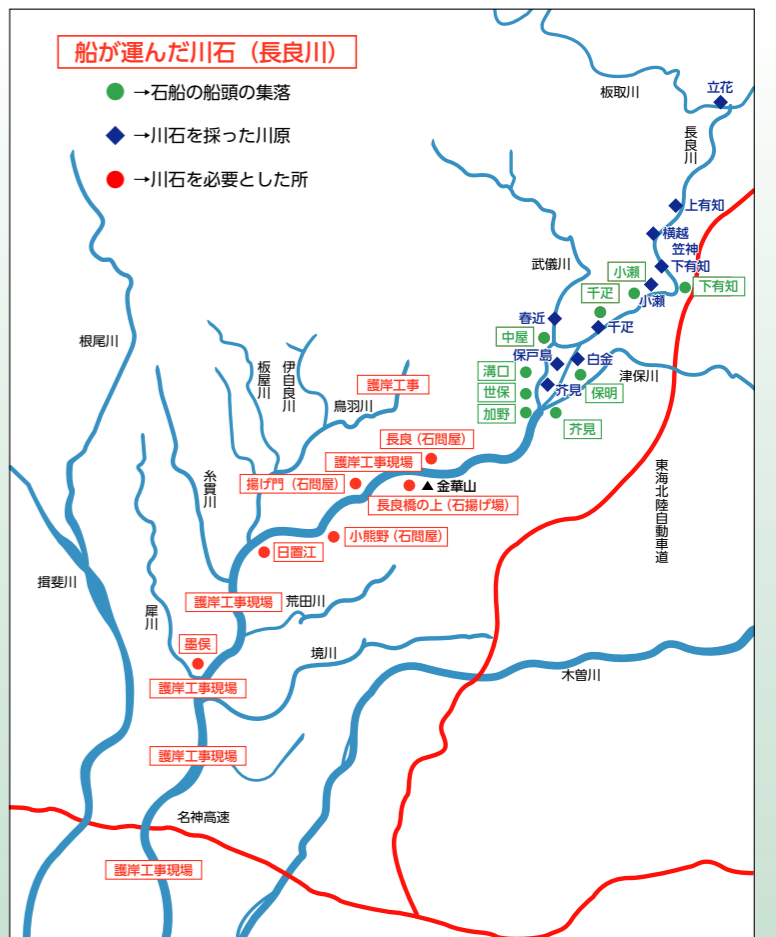
土鍋や七輪などがありました。

そして、これらの物資は、墨俣湊や尻毛湊などに運搬されました。尻毛湊からは本巣郡や揖斐郡の村々へ馬車で購入されて行きました。また本巣郡北方町や稲葉郡黒野村（現・岐阜市黒野）の小売店に送ったり荷車で運搬したりしました。また墨俣湊からは安八郡など周辺の村々に購入されて行きました。

3. 上流への運行はどのようにしたの？

伊勢湾や河口付近、下流域では、船頭たちは、帆を張り風の力を利用したり、櫂を使ったりしました。また川底が浅くなっている所では竿も利用し、上流へ向かいました。

川の主流へ向かう時は帆を張って風の力を利用するのですが、瀬の多い所には船を引っ張る人がいました。たいていは百姓の片手間で働く人で墨俣から長良までは三人一組で引っ張り、今度は五人一組で四人が引き一人が船に乗って竿で助けました。



昭和初期になると、鳥羽川の改修（昭和2〜3年）、犀川の改修工事（昭和5〜6年）が始まり、芥見の石船の全盛期を迎えました。この頃には船頭もどんどん増えて、長良川筋の美濃から長良まで180杯の石船がありました。

朝早く出かけ、石を拾い、長良や揚げ門まで下り、石を下ろして帰る。そして翌日の準備をする。の繰り返しで、農繁期以外は川の水の都合が良い限り続けました。しかし、その後、昭和10年頃で40杯、終戦頃でも30杯ぐらいいった。

次第に少なくなりまりました。伊勢湾台風（昭和34年）頃までは多少の石の需要がありました。コンクリートブロックとかテトラポットに押され、昭和42年頃には誰も石船には乗らなくなりました。

2. わら灰や土管・瓶などを下流から運んだ川船
炊事や風呂沸かしなどでわらを燃やしてできるわら灰は、昔から貴重な肥料として流通していました。

それは、長良川下流域で多く生産され、川船によって岐阜近辺まで運



武儀川沿いの中屋から桑名まで行き来していた川船は「中屋を午前6時に発し、桑名には翌日午後4時頃達す。帰船は五日間経る」と記されています。やはり、上りは下りの何倍も大変だったことが分かります。

○この文章は、「岐阜県史・通史編・近代下」「岐阜市史・史料編・近代」「長良川水系の河川水運」「古老に聞く」などをと、後藤征夫がまとめました。

岐阜市歴史博物館ボランティア
「お話・岐阜の歴史サークル」
代表 後藤 征夫
http://book.geocities.jp/gifu_ekisi/ekistop.htm
TEL 058-236-1672